



つなげる
ったえる
つづける

尚綱学院大学ボランティアチーム^{たすき}TASKI
～東日本大震災からのあゆみを未来につなげる～

本事業は、「住友商事 東日本再生フォローアップ・プログラム2018」の助成を受けて実施しております。

発行日：2020.1.31

発行：尚綱学院大学 交流推進部

宮城県名取市ゆりが丘 4-10-1

TEL/022-381-3315（大学事務室 連携交流課） TEL/022-381-3408（ボランティアステーション）

第1章 東日本大震災とは…

東日本大震災とは

2011年3月11日午後2時46分、三陸沖で発生したマグニチュード9.0の東北地方太平洋沖地震により引き起こされた大災害です。最大震度7の強い揺れと国内観測史上最大の津波を伴い、東北・関東地方を中心とする広い範囲に甚大な被害をもたらしました。また、東京電力福島第一原子力発電所が被災し、放射性物質が

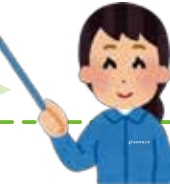
漏れ出す深刻な事態になりました。

被害は東北3県を中心に1都1道20県に及び、死者1万5,899人、行方不明者2,529人。建物被害は、全半壊40万戸超、全半焼297戸など大きな被害でした。(いずれも2019年12月10日現在)

【参考：知恵蔵、警察庁ホームページ】

【関上の「関」の字の由来】

山門の間から望んだゆり上浜
関上の「関」という文字は珍しく、辞書にもほとんど掲載されていません。この漢字が生まれたのは、仙台藩4代藩主・伊達綱村に由来があります。綱村公は、大年寺山門からはるか東のゆり上浜を望み、こう言いました。「門の中に水が見えたのは、門の中に水という文字を書いて『関上』と呼ぶように」。ゆり上の「ゆり」の文字が「洵」から、この「関」にあてられたと言われています。従来の漢字にはない日本で作られた文字(国字)です。
(出典：なとり100選)



名取市関上について

尚絅学院大学が所在している宮城県名取市は、仙台市の南側に隣接しており面積98.17km²、人口およそ79,000人です(2019.12現在)。名取市は2011年3月11日の東日本大震災によって甚大な被害にあい、市内で964名の方がなくなり、40名の方が行方不明となっています(2016.3現在)。

名取市関上地区は、名取川南岸の太平洋に面する場所に位置し、漁港を有する港町であり住宅密集地だったことから、多くの方が被害にあい、津波により一瞬にして多くの家が流されました。

関上地区の人口は、震災前およそ7,100名(2011.2現在)だったのに対し、震災から3年後はおよそ2,300名(2014.12現在)、8年後の現在はおよそ2,900名(2019.12現在)と変化しています。



2007年
5月

(提供：一般社団法人東北地域づくり協会)



--- 名取市

関上

名取市の被害状況

- 名取市の震度：6強(揺れは約3分間継続)
- 津波の到達時刻：15時52分頃
(本震発生後1時間6分後)
- 最大浸水高：参考値9.09m
(関上漁港付近の建造物の漂流物の計測による)
- 最大浸水距離：地上／約5.5km
河川／名取川約8km
増田川約7.4km
- 犠牲者数：964人(関連死含む、平成26年3月31日現在)

(提供：一般社団法人東北地域づくり協会)

(出典：名取市)

震災直後の関上の様子



出所：東日本大震災アーカイブ宮城(名取市) 提供者：名取市

高速道路が防潮堤～仙台東部道路まで来た津波～

仙台市を含む宮城県の中南部は平地のため、海岸から4kmまで津波が達しました。しかし、盛り土構造(7~10m)の仙台東部道路によって、市街地への津波や瓦礫の流入が抑制されました。仙台市の東部を北から南に走るこの仙台東部道路が、防潮堤の役割を果たし、仙台若林JCTと名取ICの間では、津波から逃げる高台として約230人が避難しました。(出典：東北地方整備局)

震災後、東部道路に避難しやすいように東部道路に上がるための避難階段が設置されました。



被災直後の仙台東部道路 仙台若林JCT～名取IC間

(出典：東北地方整備局)

当時関上にあった五差路と歩道橋

当時の関上小学校の前に、五つの道路が交差する「五差路」と歩道橋がありました。この歩道橋は住民約50人を津波から救ったそうです。五差路の北側の関上大橋では交通事故が発生し、橋は通行止めに。歩道橋の約5m下の道路は避難する車が渋滞し、多くの犠牲者が出たといわれています。現在、歩道橋の一部が「震災メモリアル公園」内に遺されています(p8参照)。

左：2016年／現在は道路の整備等により撤去されています。



2011年当時／出所：東日本大震災アーカイブ宮城(名取市) 提供者：名取市

2011年
4月



(提供：一般社団法人東北地域づくり協会)

(出典：名取市)

日和山

日和山は、関上漁港への船の出入りを見るためと、漁師が気象、海上の様子などをみるため、1920年(大正9年)に築造された山です。標高6.3mの山頂には、富主姫神社の社殿などがあり、地域の人々が集う憩いの広場として親しまれていましたが、2011年(平成23年)3月11日に発災した東日本大震災による大津波にのみ込まれ社殿が流失、石碑は倒壊してしまいました。山頂に残った木の幹に大津波の爪あとが残っていたことから津波は山頂から2.1mの高さまで水位が達したことが推定されます。(出典:名取市)

*p7-8には震災後の変化をまとめています。

震災後の日和山



震災直後 出所:東日本大震災アーカイブ宮城(名取市) 提供者:名取市

木の幹に残った傷

慰霊碑の高さ
=8.4m

6.3m



2012年5月



2019年7月 現在の日和山

昭和三陸津波の碑

昭和三陸津波の碑は、昭和8年3月3日の三陸沖を震源地とした地震により発生した津波の様子や被害の内容が記載された記念碑の1つです。(出典:名取市)

石碑には「地震があったら津浪(つなみ)の用心」と書かれ、当時の津波の被害が記されています。

しかし石碑があったにもかかわらず、過去のチリ地震や宮城県沖地震(1978年)で大きな津波が来なかったことから「関上には津波は来ない」という認識が広まっていたといえます。

「君の名は。」という映画をご存知の方も多
いと思います。実は作品の原点は関上の日
和山だと言われています。
映画監督の新海誠さんは、震災後2011年
に名取市関上に訪れ、関上の日和山のスケ
ッチを描き、そこから「君の名は。」が製
作されたそうです。
2018年に宮城県で行われた新海誠さんの
展覧会において、そのスケッチが展示され
ました。



日和山にある石碑「昭和三陸津波の碑」



2019年はじめまでは日和山のもとに(2016年5月)

地震があったら
津浪の用心



現在(2019年5月)

慰霊碑

震災の犠牲者をしのび、復興に向けた決意を表すために建てられた慰霊碑。



2019年8月



慰霊碑は、震災により犠牲になられた方々が天に上っていくイメージを表すとともに、震災を克服し、復興に向けた決意を新たに
する気持ちを込めて、「種の慰霊碑」から発芽した「芽生えの塔」が、この地に豊かさが戻ることを願う「豊穡の大地」から上へ上へと伸びていく様子
を表現しています。また、慰霊碑左右の芳名板には、碑文とあわせ、震災により犠牲になられた944名の方の御芳名が記されています。(中略)

慰霊碑の高さは8.4メートルに設定されており(「豊穡の大地」の高さを含む)、この地における津波の高さに合わせたもの
になっています。この慰霊碑を未来まで引き継いでいくことで、震災の記憶を永く将来の世代まで伝えます。(出典:名取市)

旧関上中学校

現在は解体され、新しい小中一貫校に生まれ変わりました。



2015年5月

関上中学校慰霊碑

亡くなった中学生を追悼する慰霊碑。訪れた人に優しくなでて欲しいという遺族の方々の願いから、モニュメントの角が丸くなっています。



2016年5月



当時の関上中学校は、海岸から約1.7km内陸にあり、津波で1階は浸水しましたが、多くの住民が上階に避難して助かった場所です。

震災で14名の生徒の方が亡くなりました。東日本大震災から1年
が経った2012年3月11日、旧関上中学校に慰霊碑が設置され、
しばらくは「関上の記憶」に保存されていましたが、現在は関上
小中学校にあります。

関上バスツアー学習会で見る 日和山の変化—2012～2019—

震災後より毎年実施している「関上バスツアー学習会」。
現地視察の記録から、日和山周辺の震災後の変化をご紹介します。

日和山

2012年



2014年



2018年



日和山から見た景色の変化 (水産加工団地方面)

2013年



2015年



2016年



2018年



2019年

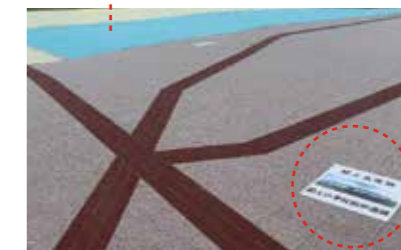


現在の日和山前の様子

日和山の上や裏にあった石碑が立てられ、2019年5月に「震災メモリアル公園」として整備されました。広場は昔の関上の地図になっており、遺構も展示されています。



昔の関上の地図



地図の関上の五差路部分



五差路にあった関上小学校前の歩道橋の一部や、商店街の街灯が遺されています。



「ここに自分の家があったんだ」



column.1
住民さんインタビュー
関上中央町内会 会長
長沼 俊幸さん



震災以降、『被災地』とよばれるようになった関上のまち。
長沼さんは、「生まれ育った関上のまちが、津波によって一瞬にして流され、子どもの頃の思い出の遊び場も、道路も、家も、大切なものの多くがなくなりました。そして東日本大震災と同じように、今や日本全国で災害が起きていて、絶対に安心・安全といえる場所はない。だからこそ、この経験を何十年、何百年先を生きる人たちに伝えていかなければならない。」といつも私たち学生に伝えてくれます。
活動の中で聞いた長沼さんのお話とその想いを、今度は私たち学生が全国の皆さんに伝えていきたいと思えます。

地震があったら津波に用心

東 日本大震災による名取市全体の死者数964名のうち、753名が関上地区の方々でした(2016.3現在)。
ではなぜ関上の犠牲者が多かったのか…？
一つは、関上が海に近い町だったこと。そしてもう一つが、「関上には津波が来ないから大丈夫」という認識の方が多かったことといえます。
あの日まで、宮城県沖地震(1978年)や過去の地震において、関上でも何度も津波警報が出されたことがあったのですが、津波は関上まで来なかったのです。このため、関上の住民の中には「関上は津

波の来ない安全なまちだと思い込んでいた」という方もいた、と長沼さんは語っています。
日 和山には、「昭和三陸津波の碑」があります(p5参照)。東日本大震災から80年近く前の、1933年(昭和8年)3月3日の三陸沖の地震によって発生した津波の様子や被害の内容が記載された記念碑です。その碑に刻まれたのが「地震があったら津波に用心」という言葉でした。しかし、碑によって先人たちが後世に残したはずの記録を、ほとんどの人が知らなかったそうです。長沼さんは震災後にその事実を知り、後世に津波の被害を伝え

継ぐには形に残すだけではなく、言葉で『今』伝えていかなければならない、と私たちに教えてくれました。



震災当日からの避難生活 ~長沼さんの場合~

- 2011年3月11日 14時46分 地震発生
- 約40分後 帰宅し家族全員の無事を確認 →家ごと津波に流され、屋根の上で一夜を過ごす
- 3月12日 自衛隊に救出され避難場所へ
- 3月14日 指定避難所へ移動
- 避難所に移ってから…
- 5月11日 愛島東部仮設住宅に移る →6年の間、仮設住宅で生活
- 2017年7月 住宅を再建し、関上へ

自分と奥さん以外の家族を避難場所へ行かせる。2人は家の様子を確認するため残ったが、「津波が来る!!」と外から聞こえてきた。外に出て急いで車に乗ろうとしたところ、津波が来るのが見えたため、家に戻り2階へ。ペランダに行こうとした時に、いきなり「ドンッ」と大きな音と共に家が揺れた。はい出て外を見たら自分の家が水の上に浮いていた。すぐに屋根裏に奥さんを連れて、そこから屋根へ上がる。何が起きているのか全く理解できていなかった状態であったが、そのまま一夜を過ごした。

そのまま屋根の上で耐え続け、翌日の夕方に自衛隊に救出され、避難場所へ移動。

「みんなどこかで無事でいるだろう…」と思っていたが、徐々に周囲から“人が亡くなった”という話を耳にするようになり、やっと「大変なことが起きているんだな」とはじめてわかった。市役所の近くの避難場所から、指定避難所の小学校へ移動。



(出典:名取市 震災アーカイブ)

寝ている人もご飯を食べている人も、隣の家族や周りの寝食の様子が全部見えるという状況が長く続くと大変。精神的に落ち着かず、自分たちのプライバシーがないといった日々が続く。

仮設住宅に移ったことで、避難所での生活と比べて「やっと人間らしい暮らしができる」と一息。はじめの頃は避難所とは違う自分たちの部屋や浴室に嬉しく思っていた。しかし、生活していく上で、部屋の狭さや不便さに不満も出るように…。 “仮設”の住宅に何年も暮らしていれば家具や食器、洋服など生活に必要なものが増えていき、少しずつ狭く狭くなっていった。

仮設住宅から関上に移り住む。住宅有志の会や町内会を通して関上の新たなコミュニティ形成に尽力。町内会長となり、様々なイベントを開催している。

自宅を再建して「良かった」ことだけではない

仮 設住宅から自宅再建したことで、新たな生活をスタートした長沼さん。震災のことを深く知らない方から「良かったね」「昔の生活にまた戻れたね」といわれることがあるそうです。
しかし、長沼さんはそれらの言葉は「ちがう」と私たちに教えてくれました。「何も元に戻っていない、昔の関上とまちの風景は全く違うし、新しい関上に残った住民さんは昔の3分の1だ。家の二重ローンも残っているし、ずっと不安に思っている。仮設からようやく終の棲家に移ることが出来て安心はしているが…」関上の懐かしい匂いや風を感じながら、「やっと関上

に戻ってきて、ここでの生活を新しく始めることができる」という気持ちと、これからの生活や、町内会運営、新しい関上の町への期待と不安が入り混じる気持ちを率直にお話してくださいました。

長沼さんはいつも学生が来ると「また5年後、10年後に関上に遊びに来て。今よりもっと変わった関上の姿を見に来てほしい」といいます。



2019年5月 関上地区まちびらきイベントにて

被災地を訪問した大学生の **声**

これまでの「関上バスツアー学習会」に参加した
尚綱学院大学の学生の感想を一部ご紹介します。

2015年



私が疑問に思ったことは、過去の石碑に津波があったことが記されていたにもかかわらず、「関上は津波が来ない土地」として認識されていたことです。過去の教訓が生かされるように、**正確な情報**を伝えていきたいです。

「**小さなことが生死を分けた。それは運命だった。**」という言葉が印象に残りました。確かに私自身も震災を経験してそう思いました。しかし、「運命」で終わらずに、これからも少しでも多くの方に、また、これから生まれてくる子供たちへ震災を語り継いでいくことが大切だと考えました。

関上で聞いた話、見たものは、5年の月日を「**まだ5年なんだ**」と感じさせられるものとなりました。初めての参加でしたが、日和山での光景、関上の記憶は後世に伝える必要があるものだと思います。

関上地区では津波による**甚大な被害と復旧工事の遅れ**を実感し、心が痛みました。愛島東部仮設住宅での住民の皆様との交流では、震災のつらさを感じさせない明るさや温かさで私の方が元気もらった気がします。

2017年



住民さんも移り住み、仮設住宅への訪問はこの年が最後となりました。

震災から6年経った関上の様子や現在抱えている問題などのお話を聞きました。「メディアなどで聞く“復興”とは、**どうすれば“復興”したと言えるのか**」というお話には考えさせられました。

約1年ぶりにバスツアーに参加したが、去年よりもかさ上げがされていてだいぶ変わっていたことに驚きました。**6年という月日は決して短いものではありませんが**、私たちが感じている倍以上に仮設で暮らしている方々は長く感じているのだらうと思いました。

2016年



2018年



新しい集会所にて、昔の関上について交流しながら教えていただきました。

7年経った今でもまだまだ元通りに戻っていません。さらには家が失われ、仮設住宅や復興公営住宅に移動することを余儀なくされた状況が多く見られ、**復興は遠い**ことを知りました。

2年目のバスツアーでしたが、昨年の秋頃に比べて土地整理が進み綺麗になっていたり、日和山の鳥居がリニューアルしたり、「**新たな関上づくり**」が促進されていることを改めて知りました。

バスツアーに参加するのは3回目でした。しかし何度訪れても、異なる視点で震災について課題や考慮することがあり勉強になりました。講話の中で「法律が復興の妨げになっていることもある」とお聞きしました。その法律は何十年も前に施行され、現在の状況に合っていないとのこと。**時代とニーズとのミスマッチ**について考える機会となりました。

一見、震災から8年経ち復興できて笑顔が戻ったように感じたが、**住民の方々がまだ気持ちの整理が追いついていない**のに次々と道の整備が進んで混乱していること、仮設住宅で5~6年ほど住んでいて生まれたコミュニティを崩され、孤立する住民の方や住民同士での溝が生じてしまっていることも今回知りました。

「住民の気持ちが追いついていない」という言葉の意味を、初めは慣れない環境で**復興のスピード**に気持ちがついていけないという意味だと思っていたが、外部(行政など)と実際に住んでいる住民の方々の復興に対する考え方や復興の段階などに差があって、それに対する追いついていないということだと知りました。

町歩きをしたのが印象的でした。**昔の関上の姿が無い**という状況の中、講師の方の好きな場所として紹介していただいたのは、日和山を見ることが出来る交差点付近でした。昔の風景は日和山しか残っていないとお聞きし、どこか寂しそうな背中に胸が痛みました。

2019年



新しく整備された町を歩きながらお話を聞きました。



2018年からはボランティアチームTASKIの学生が、関上バスツアーの事前・事後学習会や当日のガイドを行っています。被災地の変化や学びを伝えるため、活動を通じて定期的に関上を訪問しています。

